

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

チアパスにおける先住民運動(18) :
先住民族トホラバル居住地域における自治と土地防
衛闘争の展開(その3)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2008-09-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小林, 致広 メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/523

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



チアパスにおける先住民運動（XVIII）

——先住民族トホラバル居住地域における
自治と土地防衛闘争の展開（その3）——

小 林 致 広

（8） PRD=CIOAC 官製派によるラス・マルガリータス地区支配

2000年12月、連邦政府における PAN のフォックス政権の誕生と並行し、非PRI系諸政党連合のパブロ・サラサール知事によるチアパス州政府が誕生した。これにより、チアパス州の農村地域における従来の PRI 支配体制は大きく揺らぐことになる。連邦・州政府からの農村地域向けの援助資金をほぼ独占してきた PRI 系官製組織であれば、一定の援助を獲得できるという保証がなくなったのである。農民組織・生産組織のなかには、援助資金を確保するため、PRI 依存体質から脱却する道を模索するものもいた。

PRI 依存体質に大きな変化が現われたのは、2001年10月のチアパス州地方選挙である。ラス・マルガリータス地区では、CIOAC 官製派に支持されたメスティソの PRD 首長候補が勝利し、初めて非 PRI 派の首長が就任した。また、ラス・マルガリータス地区など3行政地区で構成される第20地区州議会選挙でも、CIOAC 官製派リーダーのトホラバル候補が勝利した。

この背景には、ラス・マルガリータス地区での PRI 派分裂が大きく作用している。2001年10月の地方選挙直前、PRI 派内部候補者選出の過程で、役場区と農村区を支持基盤とする2名の候補が争うことになった。内部候補選挙に敗北した農村区候補の支持グループは、連邦・州政府の座から滑り落ちた PRI に従来のような援助資金を調達する力がなくなることを予測して

表 1 : ラス・マルガリータス地区の首長・州議会選挙

1998	首長 州議会	Carlos Martin León Suárez	PRI:47.1, PRD:41.0, PT:11.9 PRI:45.6 PRD:36.8, PT:8.2
2001	首長 州議会	Jorge Luis Escandón Hernández <i>Luis Hernández Cruz</i>	PRD:57.8, PT:26.0 PRI:3.7 PRD:35.6, PRI:28.0, PT:14.7
2004	首長 州議会	<i>José Antonio Vázquez Hernández</i> Rafael Guillen Domínguez	PRD:48.1, PRI+PVEM:44.1, PT:1.8 PRD+PT+PAN:48.1, PRI+PVEM:39.1
2007	首長 州議会	Rafael Guillen Domínguez <i>Miguel Ángel Vázquez Hernández</i>	PRD+PT:? PRI+PVEM:? PRT+PT:50.4, PRI:30.8

太字イタリックは CIOAC 所属先住民トホラバル、2007年首長選のデータは未記載
 出典 : www.imocorp.com.mx

いた。

そして、農民闘争エヒード連合などの PRI 派農民組織は、地方選挙直前に PRI を離脱し、労働党 (Partido de Trabajo) 支持にまわった¹⁾。そのため、PRI 派首長候補は 4% にも満たない得票率で惨敗した。ラス・マルガリータス地区では、その後の2004年、2007年の地方選挙でも、CIOAC 官製派の支持を受けた都市部のメスティソ候補と農村部のトホラバル出身候補の組合せが、首長と州議会議員を独占している (表 1 参照)。

こうして、ラス・マルガリータス地区での PRD=CIOAC 官製派勢力の影響力は否定できないものとして確立される。とりわけ、CIOAC 官製派出身候補として当選したルイス・エルナンデス・クルス、ホセ・アントニオ・バスケス、ミゲル・アンヘル・バスケスは親族関係にあり、PRI 派のアルボレス・ギジェン知事代行の時代 (1998年—2000年) から、ラス・マルガリータス地域での利益誘導によって一族の勢力の基盤を築いていた。

パブロ・サラサー州知事との蜜月関係によって、PRD=CIOAC 官製派勢力は、マルガリータス地区に向けられる連邦・州政府の予算や援助資金の獲得のためのパイプを着々と築いていく。ちなみに、2007年度のラス・マルガリータス地区の歳入は 1 億 8500 万ペソで、その 99.99% が連邦・州政府に由来する予算となっている。²⁾

こうした地区の予算や援助資金のほとんどは基盤整備事業に使われている。とりわけ、公共サービスへのアクセス改善や経済開発推進によって「貧困と周縁化」を撲滅するという方針のもと、ラス・マルガリータス地区政府が開いた中心的な事業は農村地区の道路建設・整備であった。たとえば、2007年度の道路関係支出は4,342万ペソで、当該年度の歳入の23%に達している。³⁾

1990年代以降、土地の権利取得、農業生産計画支援をめぐってラス・マルガリータス地区で組織されたエヒード組合や生産組織の活動は、しだいに変化していった。背景には、北米自由貿易協定の発足によって、小規模農業の切捨て政策がさらに加速化したことがある。土地や生産計画援助金が確保できても、農業活動だけでは生計維持ができない。そのため、若い世代は、限られた土地での小規模農業に見切りをつけ、都市部へ移住し、出稼ぎ労働に従事するようになる。このような状況から、エヒード組合は新たな活動を展開せざるをえなくなる。エヒード組合が積極的に対応したのは、農産物流通の名目で建設された道路での物資や人の運搬に携わる運輸事業だった。

今世紀に入ってラス・マルガリータス地区で起きた CIOAC 官製派と EZLN 支持基盤組織の対立・紛争は、土地所有の問題と地区の運輸事業をめぐるものといってよい。後者の代表的な事件が、2003年9—10月に起きた車輛の無断売却を契機に勃発した一連の人質拘束事件である。

この事件の発端は、CIOAC 独立派のP氏が所有するトラックを運転していた A・M が、P 氏に無断でトラックを売却したことだった。ラス・マルガリータス地区当局の対応がなかったため、P 氏は、「土地と自由」自治地区を通じて、ラ・レアリダーの善き統治評議会 (JBG) に、トラックの返却と賠償を訴え出た。2003年9月2日、JBG 事務所に父親とともに出頭した A・M は、4日以内に車輛の代金8万ペソを返却するという条件で、JBG 当局の拘置所に一時的に身柄を拘束されることになる。

8万ペソが調達できなかった父親は、息子が拘束されているとラス・マルガリータス地区当局に訴え出た。父親が属していた CIOAC 官製派は、A・

M との捕虜交換をおこなう目的で、対立グループのメンバーを拉致するという行動に出た。9月10日、JBG 所有のトラックが接収され、運転手2名が拘束された。同時に、CIOAC 独立派のメンバー5名も拉致された。しかし、バルトロメ・デ・ラス・カサス人権委員会の仲介で、独立派4名は9月12日、サパティスタ派2名は9月18日に釈放された。⁴⁾

賠償金が調達できず、その後も A・M の拘束が続いたため、CIOAC 官製派は、10月12、13日の両日、傘下の102共同体の農民約1,200人を動員し、JBG があるラ・レアリダーまで「平和的」デモ行進を挙行することを予告した。デモ行進が予定された12日、CIOAC 官製派代表は、A・M が JBG の拘置所から釈放されたことを明らかにする。A・M に代って、州政府当局が P 氏に6万ペソを支払い、A・M は釈放されたのである。⁵⁾

ラス・マルガリータス地区における輸送・運輸をめぐる紛争は、その後もしばしば発生している。とりわけ、運輸・輸送業の認可更新の際に、州運輸局や地区政府と CIOAC 官製派との癒着が露わになる。そのことは、2006年2月14日に出されたラ・レアリダーの JBG のコミュニケでも言及されている。そのコミュニケでは、国境隣接地域における運輸・輸送業認可において、州運輸局は有力な運輸業組合と結託し、共同体を基盤とした小規模な独立系運輸業者を締め付けていることが告発されている。

告発では、州運輸当局や地区政府と結託している15組織が言及され、その3分の1は農民組織やエヒード組合である。ラ・レアリダーに本拠をおく JBG が運営する乗合トラックの路線と競合しているエウセバ乗合輸送組合も、当局と結託している15組織のひとつである。また、CIOAC 官製派、農民闘争エヒード組合、トホラバル民族エヒード組合とともに、CIOAC 独立派の名前も挙がっている。ラ・レアリダーの JBG は、CIOAC 官製派と距離をとっていた独立派がしだいに州政府に取り込まれている事態を憂慮している。⁶⁾

2006年7月の州知事選挙で、選挙直前に PRI から離党し PRD 候補として出馬したファン・サビネス候補の勝利によって、CIOAC=PRD 派勢力も

分裂状況に直面したとされる。当時、チアパス州 PRD 総裁を務めていたラファエル・ギジェンは、サピネスを PRD 知事候補として擁立することに反対していた。その意趣返しではないだろうが、エルナンデス・クルスは州インディオ民族局、ラファエル・ギジェンは州教育局のポストを狙っていたが、両者ともサピネス州政府には登用されなかつた。⁷⁾

2005—2007年に地区首長をつとめたアントニオ・バスケス(通称カマロン)は、従来の PRI 派首長以上に支持母体への利益還元をおこなったことが「評価」されている。2008年1月の任期満了時、8千万ペソの公金流用という嫌疑がかかったが、収監されることはなかつた。カマロンは CIOAC 州総裁の座に就き、州議会議員となった弟アンヘル・バスケスとともに、ラス・マルガリータス地区での CIOAC 官製派の勢力保持には成功したようである。

カマロンは、首長就任当初から、CIOAC 官製派に属する農民に対して、サパティスタ支持基盤などの「取り戻し農地」への侵入を呼びかけていた。連邦・州政府からの援助資金を受取するには、営農をしていることより、土地の権利認可証をもっていることが重要であった。そのため、土地の権利認可作業で確定されていない「取り戻し農地」の正当な所有権を主張するため、実質的な土地占拠を試みたのである。こうして、2005年から2007年にかけて、CIOAC 官製派の勢力の影響力があるラス・マルガリータス地区やアルタミラーノ地区では、EZLN 支持基盤組織の「取り戻し農地」をめぐる土地紛争が勃発するのである。

以下、具体的事例として、二つの JBG 管轄区での土地紛争について考察することにする。まず、(9) 節では、モレリアを本拠とする JBG 管轄区に属する「11月17日」自治地区とビセンテ・ゲレロ自治地区で起きた土地紛争の事例をあつかう。ついで、(10) 節では、2007年初頭から国際的に耳目を集めたヌエボ・モモンの旧農園エル・モモンをめぐる紛争をあつかうことにする。

(9) モレリアJBG管轄区における「取り戻し農地」をめぐる紛争

1. 「11月17日」自治地区における土地紛争

ススピロの紛争

2005年7月29日、ラス・マルガリータス地区のエスピロ・サントの枝村ノラムハサムにあるエル・ススピロ農場と呼ばれる404haの土地をめぐる、農民同士の衝突事件が発生し、死者1名と多数の負傷者が出た。CIOAC官製派の説明では、2003年頃、約30家族がCIOAC官製派から離脱し、サパティスタと一緒に1,500ha余りの土地を占領したという。そのため、土地をめぐる紛争が発生したという。一方、ススピロの当局者が、ラ・レアリダーのJBGに提出した申請書では、CIOAC官製派が、土地提供を見返りに外部の支援者を呼び込み、多数派に対抗してきたという。⁸⁾

衝突から20日後の11月17日早朝、CIOAC官製派の告訴にもとづいて、約400名の州警察がススピロを急襲した。州警察は、共同体の売店にあった衛星電話を破壊し、40名余りの治安要員が1週間以上も学校と診療所に駐留を続けたという。⁹⁾

カンボ・アレグレの紛争

2005年9月19日、「11月17日」自治区内にあるヌエボ・ビルヒニア（アルタミラーノ地区）のCIOAC官製派農民30名が、カンボ・アレグレという220haの放牧地の中央部4haに侵入する事件が発生した。侵入者は26戸の仮設小屋を建設したが、実際に居住することはなかった。カンボ・アレグレは、ラス・マルガリータスに居住する農園主の所有地だったが、1994年以降、サンフランシスコのサパティスタが占拠した「取り戻し農地」だった。しかし、CIOAC官製派の住民は、州政府との交渉で実際の占拠者に土地を割当てられることを見込んで、農地占拠という実績を作ろうとしたのである。

2004年には、ヌエボ・ビルヒニアの住民とサンフランシスコのサパティスタ派20家族とのあいだで、境界線を相互不可侵という合意が成立していた。しかし、CIOAC官製派は、ヌエボ・ビルヒニアの農民がCIOAC傘下に入

るなら、カンボ・アレグレの土地を確保できるように便宜を図ることを約束したという。こうして、ヌエボ・ビルヒニアのCIOAC官製派の農民によって、サパティスタ派の農地への侵入が始まった。サンフランシスコのサパティスタの要請を受け、モレリアのJBGは、CIOAC官製派当局との交渉を3度ほど試みたが、相手側の対応がなく、仲介作業はできなかったという。¹⁰⁾

ヘッセマニの紛争

2005年11月24日から25日未明にかけ、ラス・マルガリータ地区の「農民闘争」エヒードのヘッセマニ (Getsemani, Jetsemani) で、農民同士の衝突が起きた。この衝突で、CIOAC官製派に所属する農民6名が死亡、2名が負傷した。ラス・マルガリータス地区当局やCIOAC官製派は、襲撃者は覆面姿のサパティスタであると告発した。一方、モレリアとラ・レアリダーのJBGは、CIOAC官製派の指摘を全面的に否定した。11月27日までに、州警察が容疑者2名を拘束したが、サパティスタではなかった。¹¹⁾

JBGの関係者は、「農民闘争」エヒードにおける土地問題に関して、11月末までに二度にわたって声明を発表し、そのなかで「農民闘争」エヒードにおける紛争の経緯について明らかにしている。¹²⁾それによると、「農民闘争」エヒードの一部農民が、「11月17日」自治地区に属する土地を占拠する事件が頻繁に起きるようになったのは、2003年からであるという。

この衝突事件の直接の原因は、1994年のEZLN武装蜂起後に、「農民闘争」エヒードの住民の一部が占拠したエスタシオンとロス・ピノスの利用権をめぐるものだった。「農民闘争」エヒードは、もともとCIOAC派とサパティスタ派で構成されていた。1994年、両者は上記の土地に侵入し取り戻していたのである。その後、約5年間、「農民闘争」エヒードの構成員のほぼ全員、つまりCIOAC派もサパティスタもEZLN支持基盤組織に属していた。

しかし、2000年末のサラサル州政府の発足にともない、大多数は州政府からの便宜を期待し、EZLN支持基盤組織から離脱していくことになる。大多数はCIOACに再加入し、当該農地を有利な形で登録するため、ヘッセマ

ニという入植地を設営したのである。一方、CIOAC 派でもサパティスタ派でもない人々は、隣接地にヌエボ・カラコルという入植地を設営していた。

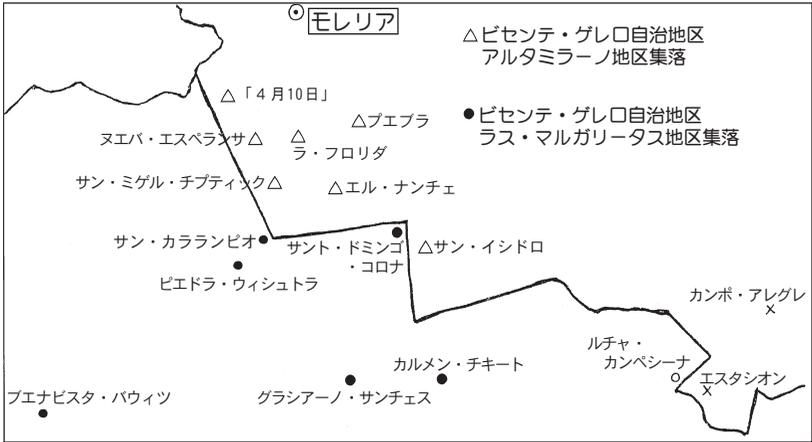
ヘッセマニの CIOAC 官製派農民は、入植地ヌエボ・カラコルへの侵入を企てていた。一方、ヌエボ・カラコルの住民は入植地を柵囲いし、防衛体制を敷くと同時に、モレリアやラ・レアリダーにある JBG へ仲介を申し出ていた。しかし、ふたつの JBG とも、対立する集団の調停は不可能と判断し、その事案から手を引いていた。

CIOAC 官製派は、2005年10月末、二つの農地、ラ・エスタシオンとロス・ピノスを占拠するように指令を出したとされる。CIOAC 官製派は、11月24日の夜、レイバ・バスケスなど他地区の農民も動員し、境界柵を撤去しようと、6名の死者が出たのである¹³⁾。CIOAC 官製派指導部は、16口径の猟銃で発砲した覆面姿の襲撃者20名のうち12名を特定し、彼らが「農民闘争」エヒードの EZLN 支持基盤組織の指導者であると指摘した。しかし、襲撃者は PRI 派とされるヌエボ・カラコルの住民だったことは確実である¹⁴⁾。CIOAC 官製派指導者の「冒険主義」による策動の犠牲者となったのは、ヘッセマニの CIOAC 官製派の農民だった。

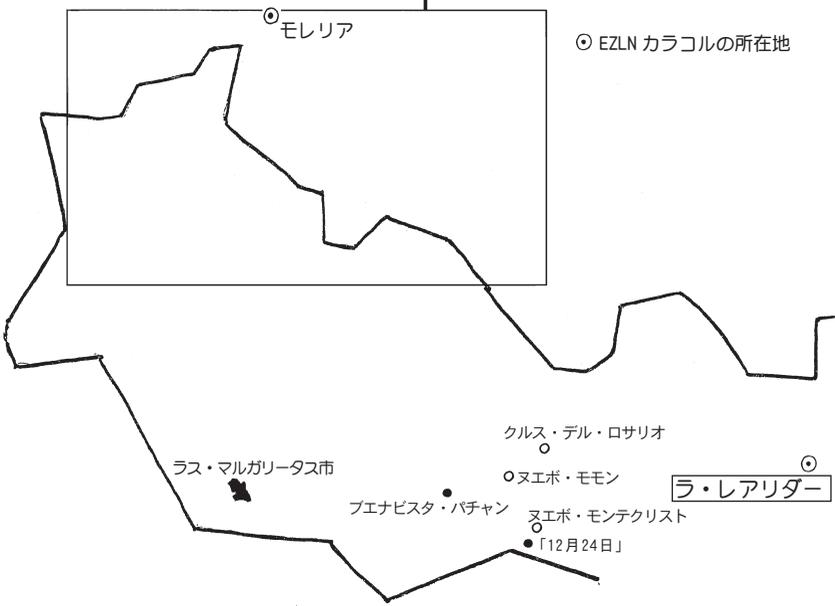
2. ビセンテ・ゲレロ自治地区のナンツェ農場

メキシコ国内における「土地防衛闘争キャンペーン」の一環として2007年4月下旬にサンリストバル市で開催された集会参加者は、チアパス州農地統一審議庁 (TUA)、農地改革省、農地検察庁宛に要請書を提出した。それは、先住民農民権利防衛組織 (OPDDIC) が暴力的に介入している土地紛争、具体的には、チロン地区のムクルム・パチャホンとアルタミラーノ地区南西部のナンツェ農場の土地紛争をめぐる司法手続きの不正を告発したものだ¹⁵⁾。

ナンツェ農場は、モレリア・エヒードを主邑とする「11月17日」自治地区から独立するかたちで2000年8月に発足したビセンテ・ゲレロ自治区を構成



↑ 上図に拡大



地図1：ラス・マルガリータス地区

表 2 : ビセンテ・グレロ自治地区の構成集落

アルタミラーノ	設立	人口	ラス・マルガリータス	設立	人口
San Miguel Chiptic	1967	435	Buenavista Bawitz	1960	511
Jayechtaj Puebla Nuevo		256	Piedra Huixtla	1945	176
Tililté Puebla Viejo	1954	144	Carmen Chiquitito	1970	163
Nueva Esperanza	1997	64	Graciano Sánchez	1952	109
San Isidro	1978	57	Santa Rita Sonora	1945	431
Nuevo San Marcos	1973	44	San Caralampio	1951	
La Florida	1953	171	Santo Domingo Corona	1984	
10 de Abril	1995	750			
Nantze		30			

人口は1990年の数値、ただし下線の数値は2003年次の推定値

出典：Enlace, Comunicación y Capacitación, AC. *Plan estrategico trienal, enero 2004-diciembre 2006*, Noviembre, 2003, p.28, CCIODH, *Primer informe de la CCIODH, CHIAPAS, FEBRERO 15-28, 1998*

する集落のひとつである¹⁶⁾。自治地区発足時には、アルタミラーノとラス・マルガリータス地区から先住民族トホラバルの居住する集落から約2千人が参加したとされている。自治地区役場は、サンミゲル・チプティック (San Miguel Chiptic) の中心部からやや離れた場所にある。2004年段階では、両地区の16共同体、約3,500人（表2、地図1参照）が参加していた¹⁷⁾。当然、16共同体すべてでサパティスタが多数派を占めているわけではない。

1998年以降に展開されたEZLN支持基盤の切り崩し工作は、先住民族トホラバル居住域ではとくに熾烈なものであった。チアパス対話交渉調整委員会の2000—04年度活動報告では、「11月17日」自治地区やミゲル・イダルゴ自治地区ではEZLN支持基盤から離脱した共同体がいくつも掲げられている¹⁸⁾。ナンツェの場合、PRI派が多数派であり、サパティスタ派は少数派である。

ナンツェ農場 (Ranchería Nantze, Nance) は、アルタミラーノ地区とラス・マルガリータス地区にまたがるチプティック大農園に所属する集落だった。大農園が解体し、サンミゲル・チプティック、プエブラ、ラ・フロリダ、プエルトリコ、サンイシドロ（現アルタミラーノ地区）、サントドミンゴ・コロナ、サンカラランピオ（ラス・マルガリータス地区）などのエヒー

ドが誕生した際、ナンチェは農場として登録されていた。¹⁹⁾ 20世紀末のナンチェ農場の人口は約500名で、同質的な社会とはいえなかった。PRI 派が多数を占め、サパティスタ支持者は少数だった。また、宗教的には新教徒が多数派であり、カトリックは少数、そして民族的にはトホラバルが多数で、メスティソは少数だった。

1994年の EZLN 武装蜂起に際して、ナンチェ農園の住民の大多数はサパティスタ側につき、一部の住民は隣接する約 2 千ha の農地の一部を占拠した。²⁰⁾ しかし、2000年 3 月、農地占拠に参加した住民の一部は、農地の共同耕作を停止し、EZLN 支持基盤組織から離脱した。しかし、彼らは、1994年に占拠した農地の利用権を主張したのである。対立を避けるため、占拠農地を19区画に分割し、当事者(10名は PRI, 9名はサパティスタ)には一人当たり50ha を割当てるという合意が成立していたのである。

両派の対立が表面化するのには、PRI 派農民が当該の占拠地の木材を伐採、無断で売却する事件が発覚したからである。知事代行アルボレス・ギジェン州政府の時期、連邦政府の支援でナンチェに製材所が作られ、運営はPRI派の社会連帯組合 Flor de Hormiguillo に委譲されていた。約 1 千ha に及ぶ森林の伐採開発計画が秘密裡に推進していたのである。²¹⁾

自治地区当局は木材売却代金の返還を求め、当該の関係者は出頭せず、材木売却の責任者の弟が自治地区当局に出頭してきた。自治地区当局は、兄の代わりに弟を収監することにしたが、家族の抵抗により弟は釈放され、兄は売却代金の一部を提出した。自治地区当局は、ナンチェ農場の違法な木材搬出を防止するためにアルタミラーノに通じる道に検問所を設置した。

2003年 4 月以降、サパティスタ支持者たちは、当該農地にあるサパティスタ派の農地を共同耕作することを決定し、サパティスタ派の所有する農地に柵を設置した。しかし、PRI 派は柵を撤去し、農地を取り囲むように塹壕を築いた。数ヵ月後、PRI 派はサパティスタ派の所有資産の一部を略奪し、自治小学校として使われていた施設を封鎖した。自治当局は、破壊行為などを

おこなった関係者の出頭と資産の返却を求めたが、誰も出頭しなかった。

その後、サパティスタ支持者が8名に減ったことから、PRI 支持者は、OPDDIC の後押しで、サパティスタ派の土地区画を領有しようと画策したのである。PRI 派農民は、農場をエヒードに格上げする法的手続きを申請し、PROCEDE による農地登録を画策した。しかし、2006年3月、第3区 TUA は PRI 派農民のエヒード申請を却下した。OPDDIC 側農民は、農地改革省職員を代理人として、2006年5月、第3区 TUA 裁定無効の異議申し立てを州裁判所に提出した。第3区 TUA は聴聞会を7月に開催しようとしたが、JBGへの連絡ができず、9月にも開催できなかった。²²⁾

2007年2月のCAPISEの告発によって、OPDDICの策動が明らかになり、2007年4月中旬、本節冒頭で紹介した国際的な連帯組織による書簡が連邦や州の農地関係諸機関に提出されたのである。5月28日、第3区 TUA は、1,569haの土地に関するナンツェのPRI派住民からの申し立ての却下を発表した。²³⁾

このような裁定が下されたにもかかわらず、ナンチェ農場にあるサパティスタ側の9区画を専有しようとするOPDDICやPRI派農民の策動は今も沈静化していない。2008年2月末、道路建設を名目に、ナンチェ農場に権利を有する3名のPRI派農民とOPDDIC指導者が率いる集団が侵入するという事態があった。その際、サパティスタ側9区画の共同耕作者25名が創設した新規入植地「4月21日」の住民が殴打されている (*La Jornada*, 1/marzo/2008)。

(10) 旧エル・モモン農園をめぐる紛争

2007年7月、サパティスタ共同体に連帯する国際的なキャンペーンが展開されたことによって、アルタミラーノ地区のナンチェ農園を舞台としたOPDDIC=PRI派農民による「取り戻し農地」の横取りという策動はとりあえず頓挫することになった。同じ時期、ラス・マルガリータス地区密林第

1 区域（ヌエボ・モモン区域）では、「取り戻し農地」をめぐる新たな紛争が勃発していた。7月17日、EZLN支持基盤組織のある「12月24日」集落の土地の一部をセルバ・エヒード組合（Unión de Ejidos de la Selva, UES）のメンバーが占拠する事件が発生したのである。²⁴⁾

「12月24日」集落は、州知事などを輩出したカステジャーノス家が所有していたモモン農園の一部を取り戻し、占拠したサパティスタ派農民が創設したものである。一方、侵略者としてラ・レアリダーのJBGが告発したのは、UESの農民で構成された「神のご加護（Gracias a Dios）」集落の住民だった。UES所属の農民は、サパティスタ派農民が専有する農地524haは「神のご加護」集落のものであると主張し、土地の一部を占拠したのである。

「12月24日」集落がある農地は、1994年1月の武装蜂起後、ヌエボ・モモン・エヒード農民の一部だったサパティスタ派農民によって占拠されたものである。1994年4月17日、EZLN司令部は、農場を占拠していた45家族に524haの耕作を認めた。しかし、1995年2月の連邦軍進駐によって、営農活動を開始していたサパティスタ派農民は避難を余儀なくされた。12年間に2度も居住地を変えるという避難生活後、2006年12月24日、EZLNの認可に基づき、45家族のうち31家族がもとの占拠地に帰還したのである。こうして、2006年末、「12月24日」集落は新时期入植地として設立された。²⁵⁾

一方、最初の占拠者たちが避難生活をしている12年間に、当該の「取り戻した土地」の法的帰属は不安定なものだった。カステジャーノス元将軍は、1995年2月に侵攻した連邦政府軍に農園の一部をエル・モモン作戦基地として提供した。一方、占有者が不在となった農場は、占拠した土地の所有権を認知する目的で設立されたチアパス州農地取得計画（「95年基金」とPROCHIAPASに基づき、²⁶⁾非サパティスタ農民組織に分配されることになる。

1998年、農場の土地525haはUESに属する近隣の3つのエヒード、つまりヌエボ・モモン、クルス・デル・ロサリオ、エル・エデン出身の農民121家族に賦与されることになった。「神のご加護（Gracias a Dios）」と命名さ

れたこの農場をエヒードとして取得することを申請した農民のために、「ヌエボ・モモン、クルス・デル・ロサリオ、ヌエボ・パライス、エル・エデン不動産信託基金」が創設された。1998年4月28日、農村信託銀行は、カステジャーノス夫妻から農場を210万ペソで購入し、同年7月30日に農場の所有権は上記の信託基金に移った。

しかし、農場の所有権が正式に121名のエヒード申請農民に移動したのは、それから5年後の2003年4月14日だった。しかも、正式に第一回エヒード会議が組織され、「新神のご加護」エヒードが発足したのは、1年半後の2005年12月20日だった。エヒードとしての実体が確立しなかったのは、農場内にエヒード構成員が居住する住宅が設営されなかったためである。つまり、新しいエヒード構成員は出身地のエヒードに住み続けていた²⁷⁾のである。

1年前に正式発足したばかりのエヒードの土地に、当初この農場を占拠していたサパティスタ派農民が戻り、住宅を建設し、営農活動を開始したのである。その事態を危惧した「神のご加護」エヒードのメンバーは、2007年3月頃から、サパティスタ派農民を違法木材伐採で告発し、家畜を農地に送り込むなど、さまざまな嫌がらせを開始した。そして、2007年7月17日、旧農園525haの土地の一部を60名以上で実力占拠したのである。エヒードの住民が属するUESメンバーが動員され、十分な耕作地を有していないオロンハ(Olonja)、サンタフェ、オホ・デ・アグア(Ojo de Agua)などの近隣共同体の農民なども含まれていた。占拠は州予防警察と連携して実行され、検問所が農場に通じる街道交差点に設営された。

UESの動員による「12月24日」集落の土地の一部占拠に対して、サパティスタ共同体を支援する諸組織は、それまでに見られなかったキャンペーンを展開することになる。UESが生産する主要商品のコーヒーのボイコット運動を呼びかけた。具体的には、UESで生産されたコーヒーを販売する店舗チェーンのカフェ・ラ・セルパでの商品ボイコトが提起された²⁸⁾のである。

1979年に組織されたUESは、1990年代に有機栽培コーヒーとしてのブラ

ンドを確立することに成功する。1996年に独自の焙煎会社 Café Tenam を設立し、1990年代後半からはカフェ・ラ・セルバ (El Café La Selva) を立ち上げている。²⁹⁾ このチェーン店は、2002年には、米国の World Resources Institute から、社会やエコロジーへの責任を果たしている企業として「ニューベンチャー賞」を授与されている。同年には国連開発計画の Equator Initiative の基金 3 万ドルの支援を受けている。メキシコや欧米の諸都市に20ものチェーン店を有する企業にまで急成長していた。³⁰⁾

2007年7月半ば以降、「12月24日」集落には市民組織のメンバー30名が常駐し、昼夜交代で、UES や駐留基地の連邦軍の動向を監視し続けた。9月下旬には緊張が高まる事態があったが、直接的な衝突は起きなかった。また、「12月24日」集落の農民が11月におこなった焼畑のための火入れの作業には、他地区のサパティスタ派農民140名が応援に赴いている。

一方、カフェ・ラ・セルバに対するボイコット運動はさまざまな形で展開され、2008年2月16日にはメキシコ市で集中的な抗議活動が展開された。³¹⁾ 国際的に展開されたボイコット運動は、UESに対して少なからぬダメージを与えたと思われる。2007年12月下旬、2年間で約5%の減収が続いたため、カフェ・ラ・セルバが新たに機能性飲料部門への参入を検討していることが報じられている (*El Financiero*, 26/diciembre/2007)。ボイコット運動によって、UES は約20万ペソの損失を被ったとされる。2008年2月末、UES は前サンクリストバル司教のサムエル・ルイスに仲介を要請したという。³²⁾

2008年4月1日、UES に所属する3つのエヒードのメンバーは、「12月24日」集落の土地の一部に建設していた仮小屋などを撤去した。州政府とUES の交渉で、「12月24日」集落が立地している土地525haを「神のご加護」エヒードから買い上げるという合意が成立したのである。

2008年2月20日に開催された農地改革省、社会開発省とチapas州政府、ならびに農民組織などの協議の場で、チapas州内の16の農地紛争への対応策が検討された。その場には、CIOAC 州総裁のアントニオ・バスケスも出席

していたという。州政府と UES との協議で、農地525ha の買取り資金は州政府が提供することになる (*Expreso de Chiapas*, 3/abril/2008)。買上げ金額は公表されていないが、相場より高めだったとされる。³³⁾

これを受け、4月末、CAPISE はカフェ・ラ・セルバに対するボイコット運動の終了を宣告した。ラ・レアリダーの JBG はボイコット運動の賛同者に感謝のコミュニケを発表し、さらに集落の唯一の取水源付近に駐留している連邦軍部隊の集落内からの撤退を求めている。

バルトロメ・デ・ラス・カサス人権センターの報告が指摘しているように、「12月24日」集落、そして「神のご加護」エヒードのメンバーも、もとをたどれば、1945年に発足したヌエボ・モモン・エヒードの構成員であった。両者とも、かつてモモン農場で働いていた農場付きペオン (peon acasillado) の末裔であり、その意味で、旧農場の土地に対して所有・耕作権を主張する歴史的背景をもっている。1994年の武装蜂起の際、エヒードのメンバーの多くは、サパティスタ派として、積極的に農場占拠に参加していた。

1995年2月の連邦政府軍の侵攻以降、EZLN支持基盤組織への締め付けにより、ヌエボ・モモン・エヒードの住民の政治的傾向には大きな変化がおき、サパティスタ支持基盤組織は少数派となっていた。³⁴⁾しかし、サパティスタ派農民にとっては、小規模な土地であれ、取り戻し農地を耕作することこそが、サパティスタとしてのアイデンティティを保った最大の拠り所であった。

小 括

カルデロン連邦政府 (PAN)、サビネス州政府 (PRD) のもと、チアパス州では、アルボレス・ギジェン州政府 (1998—2000年) のときと似たような EZLN 支持基盤組織に対する締め付けが展開している。元 PRI 系の準軍事組織を再編成した OPDDIC、州政府と一体化した CIOAC 官製派などを使ったサパティスタ共同体への執拗な迫害が日常的に展開されている。攻撃対象の多くは、土地権利関係が明確となっていない1994年以降の「取り戻し農地」

で営農活動を営んできた EZLN 支持基盤組織である。

本稿では、先住民族トホラバルの居住地域における EZLN 支持基盤組織による取り戻し農地の防衛闘争の事例として、北部のアルタミラーノ寒冷高原地域のナンチェ農場と南部のラカンドン密林溪谷地域の「12月24日」という二つの事例を扱った。二つの「取り戻し農地」が属している地域は、トホラバル・エヒード村落連合に代表される民族性を表に出した農民運動が組織されたラス・マルガリータス盆地高原ではない。民族の居住域の中核地域でなかったため、旧来の伝統的な政治構造に拘束されることなく、新たな先住民自治を構築していく可能性が高かったとも推測できる。

ラス・マルガリータス地区の北西部にあるトホラバル溪谷では、1994年末以降、サパティスタのミゲル・イダルゴ自治地区が組織されていた。しかし、EZLN 支持基盤組織の切り崩しが進行する中で、自治地区の活動実態はしだいに影が薄くなっていく³⁵⁾。この自治地区の EZLN 支持基盤組織の多くは CIOAC 系農民組織だったが、今世紀に入ると、大半の CIOAC 系組織は、PRD 州政府支持によって援助資金を確保する姿勢を明白にし、EZLN との関係性を断つようになる。逆に、PROCEDE といった新しい土地登録制度を利用し、サパティスタや独立系の「取り戻し農地」を専有しようとしてきたのである。

二つの事例においては、連帯組織の支援活動によって、EZLN 支持基盤組織の「取り戻し農地」は略取されなかったが、それはきわめて幸運な例外的なものといってよい。同時に、取り戻し農地に創設された新期入植地の EZLN 支持基盤組織でこそ、EZLN の模索する新しい形の自治の構築や実践の可能性が高いことも否定できない。自治構築が先住民族トホラバルの民族性とどのような関係にあるのかについては、今後の分析課題としたい。

注

- 1) José Luis Escalona Victoria, “Cambio social y actores políticos en el medio rural. Una experiencia en Las Margaritas, Chiapas”, *Sociológica*, año 22, No.63, 2007.
- 2) Gobierno Municipal de Las Margaritas, *Plan de desarrollo municipal de Las Margaritas, 2008—2010*, 2008, p.23.
- 3) *ibid.*, p.62.
- 4) CIOAC 独立派の指導者1名は A・M 拘束という嫌疑で拘束され続けた。一連の経緯は、JBG de La Realidad, “Secuestra CIOAC oficial a bases de apoyo del EZLN”, 14/septiembre/2003, Hermánn Bellinghausen, “Libera la CIOAC oficial a dos zapatistas que plagió”, *La Jornada*, 19/septiembre/2003, Hermánn Bellinghausen, “Preocupa a ONG conflicto entre Junta de Buen Gobierno y organizaciones sociales”, *La Jornada*, 5/octubre/2003などを参照。
- 5) CIOAC 官製派は8万ペソがサパティスタに渡ったと非難したが、実際はP氏が全額受取った。A・M解放後の10月13日, CIOAC官製派の動員でトラックが転覆し、多くの負傷者が出た。Hermánn Bellinghausen, “En su confrontación con simpatizantes zapatistas, la CIOAC llevó la peor parte”, *La Jornada*, 21/octubre/2003.
- 6) JBG de La Realidad, *Denuncia*, 14/febrero/2006. 2007年3月17日にも、コミタン発行の新聞はサパティスタが輸送業者拘束と報じるが、JBG はこれを否定している。
- 7) Rosy Pérez, “En la mira”, *Diario Meridiano*, 5/febrero/2007. サピネス州政権では、元知事代行アルボレス・ギジェンの息子が観光局長、コミタン地域の牧畜業者の顔役コンスタンティノ・カンテルが農業局流通部長の役職に就くなど、元 PRI 派を登用する人事がおこなわれている。
- 8) Amalia Avendaño Villafuerte, “Intervendrán zapatistas en conflicto agrario con CIOAC”, *Expreso de Chiapas*, 16/noviembre/2005.
- 9) Isain Mandujano, “A golpes, policias estatales desalojan a 40 familias en Las Margaritas”, *Proceso*, 24/noviembre/2005.
- 10) CAPISE, “OPDDIC: Operación despojo, Atando cabo”, *Informe*, 22/XI/2005. p.26, JBG de Morelia, *Denuncia*, 29/octubre/2005.
- 11) 事件の経緯については、Elio Henríquez, “La CIOAC-histórica culpa de la agresión a bases zapatistas; se investigará fiscalía”, *La Jornada*, 26/noviembre/2005, Hermánn Bellinghausen, “Desmiente la JBG de La Realidad que zapatistas hayan atacado a la CIOAC”, *La Jornada*, 27/noviembre/2005, Elio Henríquez, “Detienen a otro presunto homicida de 6 indígenas”, *Expreso de Chiapas*, 28/noviembre/2005, Hermánn Bellinghausen, “El PRD y la CIOAC, responsables de hechos violentos en Las Margaritas: zapatistas”, *La Jornada*, 30/noviembre/2005.
- 12) JBG de Morelia, *Denuncia*, 25/octubre/2005.
- 13) Isain Mandujano, “Fueron seis y no cuatro los campesinos muertos en Chiapas”, *Proceso*, 26/noviembre/2005.
- 14) Marco A. Estrada Saavedra, “Comunidades zapatistas:pueblo chico, infierno grande”, *Nexos*, 340, abril, 2006.
- 15) CARTA A LAS INSTITUCIONES AGRARIAS, 17/abril/2007.
- 16) 「11月17日」自治地区には、ツェルタルとトホラバルが混住する形で居住していた。約5年間、一つの自治地区として運営された後、分離独立したのは、自治地区運営で少数派のトホラバルの

- ことが十分考慮されなかったことがある。背景には、言語の違いによる意思疎通の難しさだけでなく、自治に対する考え方の文化的差異も少なからず存在した。Alejandro Cerda García, “Gobierno indígena: La disputa entre el ámbito local y autonomía regional”, *Espacios Públicos*, 19, UEAM, 2005.
- 17) ビセンテ・ゲレロ自治地区については、コミタンやオコシngo地区で共同体自律運動を支援するNGOの2004年事業計画報告書が詳しい。Enlace, Comunicación y Capacitación, AC. *Plan estratégico trienal, enero 2004-diciembre 2006*, 2003, pp.27-31.
 - 18) サンミゲル・チブティックでは、1997年に一部がEZLN支持基盤組織から離脱したとされている。Coordinación para el Diálogo y la Negociación en Chiapas, *Informe de labores, 2000-2004*, pp.45-48.
 - 19) チブティック農園の解体からエヒード創設の過程については、Violeta R. Núñez Rodoriguez, *Por la tierra en Chiapas... Corazón no se vende*, Plaza y Valdes Editores, 2004, pp.107-157.を参照。
 - 20) 以下の記述は、ノガレス(仮名)の事例として紹介している Cerda Garcia 論文に基づく。Alejandro Cerda García, “Derecho como resistencia: conflicto territoriales y agrarios en un municipio autónomo zapatista en Chiapas, México”, *Ponencia de Relaju, México*, 2006, CIESAS, pp.1-12.
 - 21) 2000年1月、セディージョ大統領は製材所に隣接して作られた森林火災防止センター開所式に出席している。2004年3月、ナンチェの製材所は連邦環境保護検察庁によって閉鎖された (*La Jornada*, 24/marzo/2004)。
 - 22) この経緯は、CAPISE, “OPDDIC:Atando cabo, parte II”, *Informe*, 24/febrero/2007, pp. 4-5. 参照。
 - 23) Hermán Bellinghausen, “Fallo del TUA reconoce la legitimidad de las comunidades y tierras autónomas”, *La Jornada*, 13/julio/2007.
 - 24) 「12月24日」に関する以下の記述は、CAPISE, “Comunidad 24 de Diciembre”, *Informe*, 27/julio/2007に基づいている。
 - 25) JBG de La Realidad, *Comunicado*, 21/febrero/2007.
 - 26) 「95年基金」やPROCHIAPASのもとで、政府は、EZLN 支持基盤組織が占拠していた土地を政府支持の立場を明らかにした当事者に対して優先的に賦与してきた。
 - 27) 「神のご加護」エヒードが創設された経緯に関しては、Centro de Derechos Humanos Fray Batolomé de Las Casas, “Conflicto de tierras en la ex finca de Absalón Castellanos, trampa incubada por el Gobierno Federal”, *Boletín de Prensa*, 14, 31/julio/2007.
 - 28) 呼びかけでは、UES による迫害についての広報活動、国内19店舗の利用停止、フェア・トレード認証国際機関への抗議、カフェ・ラ・セルバへの抗議メール送付が提起されている。CAPISE, *Convocatoria*, julio, 2007.
 - 29) UES の歴史に関しては、Marco A.Estrada Saavedra, “Entre utopía y realidad: historia de la Unión de Ejidos de la Selva”, *Liminar*, vol.IV.no.1, 2006. pp.112-135を参照。
 - 30) UES 指導者は、2008年までに国内外40店舗を展開すると述べている。José Juárez Varela, “De la lucha por la tierra a la organización empresarial: Café La Selva. Más que el dinero: implicancias económicas de la agricultura ecológica”, *LEISA: revista de agroecología*, Vol. 21, No. 2, 2005.
 - 31) 2008年2月16日のメキシコ市内の抗議行動は You Tube の映像でみることができる。
 - 32) Matilde Pérez U, “Llama al diálogo Unión de Ejidos de la Selva ante boicot de la otra campaña”, *La Jornada*, 28/febrero/2008. 2007年、UES 執行部の独断専行を批判するグルー

- ブにより、40共同体約900名の密林部組合民主連合 (UDSS) が結成された。
- 33) このような結末になることは早い段階で予測されていた。*Meridiano*90, 17/julio/2007.
- 34) 1994年の蜂起時は、サパティスタとCIOAC派がEZLN支持基盤を構成し、多数派であった。しかし、CIOAC派は徐々に州政府の援助を受けて、サパティスタが最少数派となる。Marco A.Estrada Saavedra, “Comunidades zapatistas: pueblo chico, infierno grande”, *Nexos*, 340, abril, 2006.
- 35) フスト・シエラにあった自治地区主邑も、サンカラランピオに移動したとされるが、サンカラランピオは実際にはビセンテ・グレロ自治地区に属している。自治地区の活動の低下は「取り戻し農地」が少なかったことに関係しているという指摘がある。Gemma van der Haar, “Autonomía a ras de tierra: algunas implicaciones y dilemas de la autonomía zapatista en la práctica” en Maya Lorena Pérez Ruiz coord., *Tejiendo historias. Tierra, género y poder en Chiapas*, INAH, 2005, pp.119-142.